

論文要旨

論文題名 朝鮮後期山水画にみる都市景観と景観評価に関する研究

姜 明秀

近年、韓国では、都市計画法の中に景観地区を設けるなど、都市の景観に関する関心は高まってきている。特に、都市周辺にある山と都市内を流れる河川の自然地形をいかした市街地景観の形成が要求されている。これに対応するために、韓国では都市計画制度の中に、日本にはない独自の景観地区を設け、それをさらに詳細に区分して、指定検討作業に取り組んでいる。本研究は、このような現況を踏まえて、昔から市民に親しまれてきた絵画を素材として、自然地形をいかす都市の景観を検討するものである。このような研究は、景観地区への適用のみならず、都市の総合的な景観の基本計画を考える際、役に立つものと期待される。

以上のような背景をもとに、本研究は、第 1 に、朝鮮後期山水画にみる自然景観の類型とその特性を明らかにすること、第 2 に、眞景山水画から得られた視点場と視対象の特徴からソウルにおける自然景観の空間的特徴を明らかにすること、第 3 に、日本と韓国の低層及び高層住宅地を対象として、両国の学生による写真からみる景観類型とその心理評価を行い、景観意識の差異を明らかにすることを目的としており、序論を含め、5 章で構成されている。

第 1 章は、序論として、本研究の背景と意義について述べ、既往の研究を整理し、本研究の目的と論文の構成を示した。

第 2 章では、朝鮮後期の山水画を利用して、画面に描かれている構成要素と人物の位置などの項目を用いて定量的な分析を行い、山水画に描かれている景観の類型とその特徴を検討している。

まず、朝鮮後期山水画の基本構成要素が「山中」、「河川」、「岩」、「溪谷」、「生活空間」であることを示した。ついで、山水画が美術史学上、理想空間を描いている定型山水画と現実の対象空間を描いている眞景山水画に区分されている点に着目して、この区分による類型の比較を行った。美術史学によると眞景山水画と定型山水画による相違のみが論じられているが、景観の視点によると両者とも「自然地形の景観」、「山と河川に建築物のある景観」、「山中の生活空間の景観」の 3 つの類型を得、多くの類似点を見出した。さらに、日本の水墨画との比較も行って、朝鮮後期山水画の類型と一致点が多いこと、特に定型山水画に比較的類似していることを明らかにした。

第 3 章では、眞景山水画に描かれている山地・丘陵地景観に着目して、視点場と視対象の定量的関係を検討している。

まず、視対象の性格による空間が「船渡し場型」、「名所型」、「烽火台跡型」の3つの性格を持ち、この類型ごと空間の性格を調べ、「船渡し場型」は1 km以内に視対象が位置していること、「名所型」は目に付きやすい山が視対象となっていること、「烽火台跡型」は奥行き感を感じる山を視対象としているなどの特徴を明らかにした。ついで、指標間の平均値の差の検定を行い、「船渡し場型－名所型」との関係では標高と距離の指標が有意な差を持っており、「名所型－烽火台跡型」との関係では標高と距離、角度と見込み角の指標が有意な差を持ち、「船渡し場型－烽火台跡型」との関係では見込み角、傾斜、視線入射角の指標が有意な差を持っていることを明らかにした。さらに、これらの3つの類型は、ソウル市で定めているソウル市都市計画条例による景観地区の6つ詳細地区のうち、水辺景観地区、眺望圏景観地区、の2地区に該当し、「船渡し場型」が水辺景観地区に該当しているが、視対象は現存しないこと、「名所型」と「烽火台跡型」は、眺望圏景観地区に該当するが、視対象までの眺望が確保されていないこと、などの問題点を明らかにし、これらの地区において視点場の整備が必要であることを示した。

第4章では、日本と韓国における低層及び高層住宅地での景観の特徴を、両国の学生へのアンケート調査を用いて、写真にみる景観類型と写真から判断する景観評価について検討している。

まず、両国の住宅地景観は、それぞれ独自の景観を形成しており、その中でも、日本の住宅地は緑地などの自然的なオープンスペースに特徴を持っており、韓国の住宅地は道路空間などの人工的なオープンスペースに特徴を持っていることを明らかにした。

次に、アンケートによる心理量から、住宅地の景観評価をする際には、日本側も韓国側も「美しい」の項目が共通して重要視していること、日本側は「快適さ」を、韓国側は「開放性」、「自然性」を特に重要視していることが明らかになった。また、日本側、韓国側ともに、日本の低層住宅地と高層住宅地に対しては、空間の広がりに関する評価で共通の認識を持っていることがわかった。

さらに、日本側は、日本の景観と韓国の景観という差よりも、低層住宅地と高層住宅地の差を強く認識しており、韓国側は、低層住宅地、高層住宅地という住宅地景観の差よりも、日本の景観と韓国の景観の差を強く認識していることが明らかになった。一方、景観の総合評価をみると、日本側は日本高層住宅地を、韓国側は日本低層住宅地を、一番高く評価していることを明らかにした。

第5章では、各章の結論をまとめて、総括している。